

「命と食の挑戦」
---終末期医療の現場---

3/25/2013

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

NHK/BS で 3 月 16 日に放送された、「人生のディナーを召し上がれ『命と食の挑戦』は、人間の最期において「食べたいもの」を通して「人生の思い出」を彷彿させるひと時を表しており、大変興味深く見た番組でした。

内容は、大阪にある「淀川キリスト教病院」の分院であるホスピス病院での取材でした。そこでは、末期がんの患者に週に1度、自分の希望する食事を叶えるという取り組みでした。その食のことで死と立ち向かう人に特別な力を与えてくれる「リクエスト食」と称して、平均余命 1 ヶ月の患者に提供しているのです。

ある人は、3年ぶりに好物のバッテラを注文すると、厨房の調理人がしめサバを求め街に出かけ、それを料理しバッテラを夕飯として提供したり、また野菜が嫌いな人は、昔家庭で食べた「お好み焼き」を作ってもらい批評する場面がありました。「焼き方はもっとパリパリにして」と。次の時、調理人はその声を活かし、ご本人の口に合うものに仕上げていました。そこには、ご本人の満足な笑顔がありました。また、食道がんの人は、流動食しか食べられないのに「らっきょ」を食べたいと言います。これらは、全て昔自分が味わった思い出の食べ物なのです。食べられなくても、においや見た目で満足することも大切なのです。私もたまには、昔食べた母親が作ってくれた「かきもち」や「たまごかけごはん」「バターごはん」を食べたいときがあります。

番組を見て、食べることを通して、昔を思い出す、「リクエスト食」の考えはよいものだと思います。

ある末期のガン患者は「スキヤキ」を奥様と一緒に病院内の和室で夫婦一緒に召し上がる場面がありました。ガン患者の夫は、豆腐一切れしか食べきれなかったのですが、妻には、「おなか空いているからたべてなあ」とやさしく言葉かけされたとのこと。もう、一緒にご飯を食べれないと思っただけでしたが、このような最期の機会に夫婦二人で穏やかな時間が持てること、お互いの優しさを感じることができる配慮は大変すばらしいものです。

この食事を提供している栄養課の課長は「ホスピスは家庭の延長です」と言っていた言葉が印象的でした。食べることは命につながる。まさにそう思った映像でした。

以上